

〈書評論文〉

中国人および日本人をめぐるレイシズム —— 東アジアの人々が「黄人」になった経緯 ——

Michael Keevak,
Becoming Yellow: A Short History of Racial Thinking
(Princeton University Press, 2011)

サンドロヴィッチ・ティムール

1 はじめに

本書の著者であるマイケル・キーワック（以下 M. キーワック）は現在、台湾国立大学の外国語学部において教鞭を取っている。彼が専門としているのは、1500-1900 年代のヨーロッパとアジアの交流史、ルネサンスとバロック、そして比較文学である。キーワックは本書において、500 点を超える文献を参照しながら、アジアに居住する民族がどのような歴史的および文化的な過程を経て「黄人」⁽¹⁾ となっていたのかを明らかにしようとしている。

その「黄人」概念に関しては、現在も特に何の疑問も感じずに使用する人がしばしばいるように思われる。例えば、日本の教育現場の例が象徴的である。平成 24 年度の地理および世界史の教科書においてもなお、「黄人」ではないにせよ「モンゴロイド」に関する記述がみられるほどだ。出版社によってはむしろ記述の仕方が異なるものの、「モンゴロイド」が「ネグロイド」および「コーカソイド」と並んで紹介されている部分がある。

本書はそういった文脈において二つの重要な役割を果たしていることを強調したい。一

⁽¹⁾ 日本においては、「黄色人」もしくは「黄色人種」のほうがなじみがあるように思われるが、本稿では酒井直樹に習って「黄人」を使うこととする。酒井は『レイシズム・スタディーズ序説』（編飼ほか 2012）において、ほかの人種に関して「白人」や「黒人」などが使われるのに応じて、アジアの民族に対しても「黄人」を使うべきだと指摘する。

つ目は、「メインストリーム」のレイシズム研究、例えば G. M. フレドリクソンの『人種主義の歴史』のように白人、黒人、ユダヤ人の関係性を中心にレイシズムを描くような研究 (Fredrickson 2002) においてしばしば看過されてきた歴史を検討することにある。また二つ目は、「メインストリームではない」領域において「メインストリーム」の研究がなされてきたのと同様の形で、人種概念が形成された歴史を明らかにすることである。

第3節の考察でも詳しく論じるが、本書のアプローチはこうした長所ばかりではない。一つの短所として、本書の全体としての枠組みが E. W. サイドが提唱したオリエンタリズム的なパラダイム (Said 2003) からそれほど離れていないことがあげられよう。

それでは、本書の内容紹介に移りたい。

2 内容紹介

本書は、「はじめに」と五つの章から成り立っている。本稿では、それぞれの章の内容を要約し、本書の考察にすむ。

「はじめに」(「もはやホワイトではない：19世紀の黄色性の発明」)では、著者が本書を著すことにいたった経緯やきっかけを明らかにし、本書の構成および先行研究を紹介する。西洋人が想像・創造する東アジアの人々がなぜ、どの時点で「黄色く」なったのかということに対する好奇心は、本書を含む研究プロジェクトのはじまりであった。M. ポーロをはじめとして13世紀のヨーロッパからアジアを訪問した旅人の記録では、東アジアの人々は確実に「ホワイト」であった。それがいったいつ変わったのかという問いは、著者の出発点であると同時に彼が解き明かそうとしているものでもある。

本書の分析対象となっているのは、中国と日本のみである⁽²⁾。中国において「黄色」は歴史的に大変重要な位置を占める色であった。なぜなら、それは中央の色、皇帝の色、土の色だからである。しかし、19世紀までは東アジアの人の肌の色が「黄色かった」という記録はない。それはむしろ、19世紀に入ってからレイシズムによって構築されたものである (pp. 2-7)。

ダンテ・アリギエリの『神曲』「地獄篇」におけるサタンの中の顔の色、および古代エジプトの墓から発掘された絵にふれながら、著者は19世紀の時点で「アジア人」=「黄人」という連想ができあがった過程を明確にする。アジア人は、それ以前には「白い」と

⁽²⁾ 著者は、東アジアの中でも日本と中国のみを本書の分析対象に選定した理由に関しては、特に説明していない。

記述されることもあったし、また色が意識されないことも多かった。その類の記録および記述が第I章にて詳細に分析されていく。

2-1 第I章 「彼らが黄人になる前：初期の旅行記および宣教師日記に見る東アジアの人々」

アジアを訪れていた18世紀末のヨーロッパからの旅人および宣教師にとって、自分たちヨーロッパ人との差異のマーカーとして肌の色はそれほど重要な位置を占めていなかった。M. ポーロ等の12世紀末以降の旅行記において、日本および中国の人々が「ホワイト」(“bianca”)として位置付けられたのは、いささか意外なことであった。現代でいうインド周辺地域に居住していた人々が、中世あたりから「色をあびた」(“tinged with color”)人と呼ばれていたことを考慮すると、東アジアの住民が「ホワイト」として区別された原因の一つは、インド地域の人々との対比にあったことが分かる。もう一つの原因は、中国人および日本人が高く発展した文明を持つことが想定されたことである (pp. 23-8)。

日本の場合、日本人にキリスト教の文明が受容されると見込まれたことが、例えば1552年にフランシスコ・ザビエルによって「ホワイト」と呼ばれていた理由の一つであった。ここではキリスト教の受容が肌の色と結びつけられていることがわかる。しかしながら、日本国内でキリスト教の宣教師が弾圧などを受けることになって、日本が事実上鎖国したのち、ヨーロッパにおける宣教師日記のトーンも変化し、日本人の肌の色も「茶色」になったり「オリーブ色」になったりしていた (pp. 26-30)。

翻って中国の場合、「ホワイト」と呼ばれていたこともしばしばあったが、国の大きさ、地域的な特徴、国民のジェンダー、年齢、社会階級などの差異から1600年までに「茶色」、「赤色」、「黄褐色」(“tawny”)、「黒色」、「浅黒」(“swarthy”)と呼ばれ、それ以降の200年あまりの間さらにさまざまな色の肌の民族として位置付けられていた。また、1585年にJ. メンドサの *Historia del gran reyno de la China* が出版されると、それがいくつもの言語に翻訳され、英語版では“blanco”(「白」)および“rubio”(「ルビー色」)が“yellow”(「黄色」)として訳され、中国人は北ヨーロッパ人と同じように肌色が薄い国民として意識された。しかし、ラテン語版とドイツ語版ではそれらが“yellow”と訳され、中国の北の地域(ドイツ人に似た、肌の色が「黄色い」)人と広東地域(もっと肌の色が濃い、黄色い)人とが区別された。同じ黄色でも後者が前者よりも「より黄色い」とされていた。以上のように、中国および日本の住民は「ホワイト」ではなくなっていた (pp. 31-5)。

2-2 第II章 「黄人の分類:18世紀におけるリンネ、ブルーメンバッハ、そして『モンゴル』人種の創造」

本章の冒頭で著者は、東アジアの人々を「黄色い」と呼ぶことについて、彼らはアフリカの人々ほど皮膚の色が濃い人ではなかったが「白い」人として認識されることも同時にできなくなったと第I章の内容を要約している。そして、「黄色い」アジア人の分類の系譜をC. リンネおよびJ. F. ブルーメンバッハの人種分類を中心に説明し、人種分類の議論を明らかにしている。1684年のF. ベルニエの分類においてインドの民族が「黄色かった」こと、リンネによってホモ・サピエンスに四つの色が与えられたこと、さらにアジアの人々の「黄色さ」が変化したこと、「善良」(“good”) および「悪質」(“bad”) な黄色い人種が議論されたこともあげられる (pp. 43-57)。

リンネの主な関心は、世界を体系化することであり、その関心にそって彼は自然界の分類を試みた。彼は1735年に出版された『自然の体系』において、動物界のトップにホモ・サピエンスを置き、ホモ・サピエンスを地理的な分布および色によって四つの種に分類した。それらはすなわち「白っぽいヨーロッパ人」、「赤っぽいアメリカ人」、「茶色い(暗い)アジア人」および「黒いアフリカ人」という四つであった。アジアの*fuscus* (ラテン語で「茶色い」「暗い」) に関しては、1758-59年に出版された第10版において*luridus* (「黄色」、「淡黄色」など) に置き換えられた (pp. 51-2)。

上記のような過程を経て、18世紀末には肌色ではなく、頭蓋骨の形に重点をおいていたブルーメンバッハによる人種の五分類が提唱されることとなった。それはすなわち、ヨーロッパ、西アジア、シベリアと北米の一部に住む人々 (「だいたいわれわれと同様の格好をしているもの」=「コーカシアン」)、アジアの残りの地域に住む人々 (*fusci* [「暗い」] もの=「モンゴリアン」)、そしてアフリカ (=「エチオピアン」) と北米 (=「アメリカン」) に住む人々である。後に、南太平洋に住む人々 (*intense fusci* [「極めて暗い」] もの=「マライカン」) が分類に加えられた。ここで興味深いのは、色が当てられたのはアジアと南太平洋の人々のみであった点だろう。また、ブルーメンバッハの分類においてはじめて「退化」という概念が強調された (pp. 57-62)。

その後、頭蓋骨の測定による人種分類が方法として定着した。さらに、その分類に基づいて「東洋から来た黄色い人」像が構築されたと著者は主張している。

2-3 第III章 「19世紀の人類学と、『モンゴリアン色』の測定」

第III章では、モンゴリアンの肌の色が測定されるようになる過程が明らかにされている。19世紀のはじめ頃には、人種は気候もしくは文化的実践によって変容するものではな

く、もっと永続的で生物学的に規定されるものと考えられるようになった。

そうしたコンテキストの中、著者が前章で見てきたように、ブルーメンバハが提唱した五つの人種カテゴリーにおいては「モンゴリアン」および「エチオピアン」がヨーロッパの理想から一番かけはなれていた。このような考えが19世紀初頭にキュビエによって継承・簡略化され、白色＝コーカサス、黄色＝モンゴリアン、および黒色＝エチオピアンという人種の三分類が生まれた。モンゴル人種がちょうどコーカサスおよびエチオピアンの中間的な位置づけになった（pp. 77-8）。そうした分類の延長線として、「白色」が「色の無さ」として位置付けられ、「アジアの黄色いモンゴル」がヒエラルキーの下から二番目のところに位置付けられた。

人種の分類に関する議論などを経て、19世紀の人類学が頭蓋骨比較および肌色の測定という「新しい段階」にいたったのである。特に有名なのは医学者のP. P. ブローカで、彼は文明化されていない土地に旅する人々のためのガイドとして、目の色を測定するための20色の円と、肌および髪の色を計るための34色の長方形の表を作成した（pp. 83-6）。

肌色の測定過程のもっとも奇妙なものとして、子供の遊び道具であった「カラー・トップ」⁽³⁾が19世紀末から20世紀初頭に肌色の測定に使われるようになった事実があげられる（pp. 89-100）。

2-4 第IV章 「19世紀の医学における東アジアの人々の身体：蒙古襞、蒙古斑およびモンゴリズム」

著者は本章において、モンゴル人種に特徴的だと思われていた身体上の特性にふれる。それは、「蒙古襞」（“Mongolian eye fold”）、「蒙古斑」（“Mongolian spot”）および「ダウン症候群」（“Mongolism”）である。

それら3点の特性は、モンゴロイド人種によく見られ、白色人種にはなかなか見られないと主張する研究が、19世紀から20世紀の前半には多数なされてきた。しかし実際は、3点とも、モンゴル人種に特有のものであるという明らかな科学的な証拠は確認されず、本書ではそれらが西洋から見る東アジアの言説の中で使用されていたことが強調される。

東洋の人々は「目が小さい」という発想自体は三つの特性の中でもっとも古く、16世紀の旅行記においてはすでにそのような記述がある。しかしながら、「蒙古襞」というのはどちらかと言えば目のサイズではなくまぶたの位置が重要となってくるもので、19世紀

⁽³⁾ 学校で子供たちに色の組み合わせのパターンを教えるために、19世紀に考えられたおもちゃである。真ん中に軸となる木製の棒があって、それにさまざまな厚紙（木製）の円盤がつけられ、それらを重ね合わせることで色の組み合わせの勉強ができるようになっている。

になって P. F. B. フォン・シーボルトが編集した百科事典において、斜めになったまぶたとモンゴロイド人種が関連づけられたのである。そして、それが次第に「上の」人種が発達の過程において通過するものとして位置づけられ、発達の「エラー」および「余分な」皮膚などと論じられた (pp. 101-7)。

「蒙古斑」は、19 世紀の後半にお雇い外国人として日本に招待された E. フォン・ベルツが作った概念で、生まれてくるすべての日本人の赤ちゃんに見られるものと指摘された (p. 108)。事例数こそ少ないが、蒙古斑がヨーロッパの赤ちゃんの間でも見られるという知見が蓄積されていっても、ベルツが自身の主張を変えることはなかった。また、ここでも差異を特定することではなく、差異の解釈の仕方にこそ問題があったとキーワックは指摘する (pp. 108-13)。

「ダウン症候群」の別の名称である「モンゴリズム」は、イギリスの J. ダウンが使ったものである。彼は、「ダウン症候群」にかかった患者たちを分類する中で、ブルーメンバッハが使った人種の四タイプを採用した。その中では、「モンゴロイド」に似ている患者たちが「退化」段階におかれていた人たちであった。そのあと様々な議論がされたが、ダウン症患者が「モンゴロイド」に似ているという記述について疑問の声をあげる者はいなかった (p. 121)。

2-5 第 V 章 「黄禍論：『極東モンゴリアン』の脅威, 1895-1920」

本章では、「黄禍論」言説が形成、発展された経緯が明らかにされるとともに、中国および日本における「黄人」像の受容に焦点が当てられる。

1870 年代までには中国が「黄色い脅威」(“yellow terror”) と呼ばれるようになり、1877 年にはモンゴロイドの「黄色い人種」が世界人口の 44% をしめているなどと恐怖心をあおるような指摘もあった。そして、「黄色い恐怖」(“yellow peril”) 自体はヴィルヘルム 2 世が描いた絵画につけられたタイトルであった (pp. 125-7)。

中国では以前から「黄色」が皇帝の色として考えられ、国民にとって馴染みのある色ではあったが、西洋の「肌の色」解釈ではなかなか使用されてこなかった。西洋のレイシズムによって与えられた「黄色」という人種概念と、黄色を高貴な色とする中国の世界観とが結びつき、色に関する独自の解釈も生まれた。たとえば、20 世紀初頭の中国において、西洋の「銀色の人々」に対して優位である「金色の人々」という言説や中国の栄光および優位性としての「黄禍論」の位置づけ (p. 130) の試みがあった。また、中国国内の民族の文明化のレベル、あるいは外国の民族を描写するために、「黄色」が比較的ニュートラルな意味合いで使われていた (p. 133)。

一方日本に関して言えば、「黄」ラベルの受容に対して恨みの気持ちが込められる場合が多かった。その原因として、西洋によって中国と一緒にされなくなかったことや、「黄」とは日本の帝国としての野望を羨んでいる西洋の国々において作られた概念だとされたこと、他のアジアの国々より文明化されている国であると考えられていたことなどがあげられている (pp. 134-5)。同時に、1904年には西洋のレイシズムに対抗するために、日本人は黄色の肌と白い心を持っていると主張する人もあったほど、肌の色に意味を付与するようなレイシズム的発想そのものは日本国内の言説の一部になっていた。アジア全域に社会的および経済的な希望をもたらしうる「黄色い希望」(“yellow hope”)という日本の肯定的な表象もあった。

本章末には「黄人」概念が第二次世界大戦後にもいかに長い間使われていたかということが強調される。例えば、「人種問題」と題した1950年のユネスコ宣言では、人種概念とそれに付随するヒエラルキーの神話性を取りのぞくことが目標として掲げられたはずであるが、「モンゴロイド」、「ネグロイド」、「コーカサス」を「ほとんどの人類学者が合意する三つの分類」として定義していた。さらに、モンゴロイドに関しては1952年にユネスコによって発行された『人種とは何か』という小冊子において、「北東アジアでは肌が黄色い人々がいる」と主張され、「モンゴロイド」の肌色は「淡黄色から黄褐色」で、「赤褐色もたまに見られる」とあった (pp. 141-2)。

「黄色」という概念が他の色よりも捨てがたかったことのもう一つの例があげられる。1968年に出版された一般民俗学に関する著書、*Encyclopedie de la Pleiade*において、H. V. ヴァロワが人類を分類するカテゴリーとして「白」「黒」および「黄」を強調し、「白」および「黒」が近似的な表現にすぎないと述べた後、中国および中央アジアの民族を含む「中央モンゴル人種」では「黄人の特徴がはっきりと見え、肌の黄色いトーンがもっとも顕著である」と締めくくった (p. 142)。

3 考察

本節では、本書に対して2点に分けて考察する。すなわち、まず東アジアにおける「黄人」概念の受容について本書の議論が不十分であることを述べ、次に、本書はE. サイドが提唱した「オリエンタリズム」からそれほど離れていない点にふれる。

3-1 東アジアにおける「黄人」概念の受容

M. キーワックの場合、彼も本書の中で認めているとおり、分析の対象となっているニカ

国における「黄人」イメージの受容に関して、それほど詳しく論じられていない点が課題として残されている。次節でもふれることになるが、それはもしかすると E. サイドの『オリエンタリズム』にも見られるような「権力関係」、あるいは「力関係」に近い意識が背景にあることに起因しているのかもしれない。

2-5 節でふれた中国および日本における「黄人」概念の受容に関しては、たとえば次のように共通点を見出すことができる。すなわち、コンテクストがやや異なっていたにもかかわらず、どちらの国においても西洋のレイシズム的な考え方をある程度受け入れて吟味してから、国民が納得のいくように、中国人もしくは日本人にとって有利な形で位置づける議論が生まれていたと言える。その点に関しては、これからもさらに詳しい研究を行う意義があるだろう。

なぜならば、表象と権力に注目するような社会科学研究において、「表象する側」・「眼差す側」にどうしても注意が向けられるのは、理解に苦しむわけではないが、「表象される側」・「眼差される側」における言説や言論にも目を向ける必要があるように思われるからである。

そのようなスタンスに基づいて、日本および中国、そしてそれ以外のアジアの国々における「黄人」概念の受容および変容を明らかにすることが重要な課題となってくるが、それと同時に東アジアの国々におけるそのイメージの比較研究、および「白人」概念の変容の究明もこれからのレイシズム研究にとってやらなければならない問題の一つでもある。

3-2 「黄人のアジアの民族を見る西洋」パラダイムに関して記述することの限定性

前節で述べたとおり、本書のアプローチ自体はある種の「オリエンタリズム」的な眼差し⁽⁴⁾の例として位置付けられるかもしれない。なぜならば、本書で注目されている「黄人」概念は、本書の内容紹介でも明らかにしたように、東アジアの人々の肌色が「実際に」黄色かったから「黄色く」記述されるようになったのではなく、むしろヨーロッパにおける人種概念形成および人種分類などの過程において、便宜的につけられたものだからである。あるいは、ヨーロッパ人を「白く」するために、そのように記述されはじめたのかもしれない。

本書は、「黄人」概念を詳細に分析し、それができあがった過程などに焦点を当てることで、表象の権力性を批判的に分析しているように見受けられるかもしれない。しかしな

⁽⁴⁾ ここでいう「オリエンタリズム」的な眼差しとは、「西洋が表象する東洋」という意味合いにおいて使用する。

がら、主に西洋で著された文献の検討に基づいて、東アジアの人々に対する眼差しの変遷に関する分析を行うことは、視点を変えれば西洋が東洋を見るパラダイムのフレームを脱け出していないともいえるだろう。換言すれば、レイシズムの言説の中で構築されてきた概念の分析において重要となってくるのは、その概念の形成過程が明らかにされたこと自体よりむしろ、その概念の分析がそのようなスタンスで行われてきたことのほうである。

筆者は M. キーワックの成し遂げた偉大な仕事を過小評価するつもりはない。本書の長所を認めながら、著者の研究対象の選択に注目したい。彼が、東アジアにおける「白人」概念の形成および変容ではなく、主にヨーロッパにおける「黄人」概念を考察の対象にしたという、その研究対象選択そのものが、大きく見れば「オリエンタリズム」の枠組みの中で行われたものだと主張することができる。換言すれば、M. キーワックが試みた「オリエンタリズム」の「西洋が表象する東洋」の権力関係の中で、中国人および日本人を対象にして形成された「黄人」概念分析を行う行為自体が、「オリエンタリズム」的な枠組みとはそれほど距離をとっていない、というのが本節の主な主張である。

4 おわりに

ここまで、本書を考察してきたが、本稿の最後に本書が出版された意義およびそれが担う役割に関して簡単に追記しておこう。東アジアの民族を対象にしたレイシズムの問題が議論されている点に関しては、本書は大変重要な役割を果たしているように考えられる。また、「黄人」概念の形成、発展過程およびそれに伴う歴史的な描写などにおいては、本書はレイシズム研究者だけでなく、一般の読者にも大変有意義かつ示唆に富んだ指摘を与えてくれることが確かである。

同時に、著者の関心は「黄人」概念の形成過程を明らかにすること自体に焦点化され過ぎているように思われる。M. キーワックが本書の執筆で成し遂げようとしたことがそれのみだと考えると、本書から得られた知識を手に入れ我々が見る世界がどのように変わっていくのか。あるいは、世界そのものが変わるのではなく、われわれがそれに向ける眼差しそのものがいかに変わっていくのが課題となってくるだろう。

その変わっていく眼差しには、「色」のついていない世界観に基づきながら「表象される」側における「表象する」側のイメージに焦点を当て、検討することも含まれるであろう。それは、本書を講読し筆者が考えた一つのパースペクティブにすぎないが、これからそれをベースにした研究がさらに増えていくことを期待したい。

参考文献

Fredrickson, George M., 2002, *Racism: A Short History*, Princeton: Princeton University Press. (= 2009, 李孝徳訳『人種主義の歴史』みすず書房.)

Said, Edward W., 2003, *Orientalism*, Penguin.

鵜飼哲・酒井直樹・テッサ・モーリス＝スズキ・李孝徳, 2012, 『レイシズム・スタディーズ序説』以文社.

(サンドロヴィッチ ティムール・博士後期課程)